

## 教会の袖廊 (THE CHURCH—PORCH) : 清めの柄杓 (PERIRRHANTERIUM)

鬼塚, 敬一  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5349>

---

出版情報 : 言語文化論究. 5, pp.127-146, 1994-03-30. 九州大学言語文化部  
バージョン :  
権利関係 :

教会の袖廊 (THE CHURCH-PORCH)  
——清めの柄杓 (PERIRRHANTERIUM) ——

ジョージ・ハーバート (1593-1633)・鬼塚敬一(訳)

1

花やぐ若さと前途有望ゆえに

己れの値と評価を上げ、宝ものよと目をかけられる君よ。

詩作者に耳を傾けたまえ。彼ならもしや君の心を

善へむけて韻をふませ、愉悦の餌を与えることが出来るやも。

説教ならば逃げだす者をも、詩歌は把えて

喜びを 神への犠牲に変えることも出来るだろうに。

2

情慾には気をつけたまえ。洗礼の砌、神が

自らの御血をもって洗い清め給うた者をも、情慾はひどく穢してしまう。

それは君の心に印された教えをも 消し去って、

聖書の文句をも 理解できなくするのだ。

情慾こそが 己れの教本のすべてでもある輩に

聖書に眼を向けることが 出来得ようか、ましてや神に。

3

完全な禁慾か、それとも結婚を。心寛き神は

君に選択肢をお認めくださる。逃げ道などはよしたまえ。

喜んで迎えることだ、神の賜うものを。

怨みに思うな、君の情慾に限度と障害とがあることを。

禁慾にも喜びがある。両者を秤ってごらん。

もしも墮落の方がまさるようでは、天国はおさらばだ。

4

もしも神が 土地をすべて共有地にされていたなら

さだめし人間は 共有地の囲い込み者になっていたことだろう。

だが今や、神が我らを囲い込まれたため、逆に  
ひとはその囲いを破って、あらゆる土地を耕さんと慾す。

おゝ、人間はどんなにかなるだろう、もしや身体からだの各部のあるべき位置を誤れば！  
神に逆らうためなら、必ずや、彼は足と頭とを置き換えさえもするであろう。

## 5

三杯目の酒盃は飲むでない。いったん飲み込めば  
それを飼い馴すことなど 君には叶わぬ。  
でも飲む前なら それは思いのままだ。  
君に恥辱じぶつをあびせるその酒盃は 床の上に注ぎたまえ。  
そ奴じべたを地面に放うことこそ 至当の行為、  
もし飲み続ければ、そ奴がこちらを地面に放うとすれば。

## 6

酔っ払いは 己れの妹をみごもる母親をも、  
殺しかねない。手綱を失い、  
自らの手で 己れを社会から葬り去るのだ。  
あらゆる悪が 酒と共に血管の中へとすべり込む。  
飲んだくれは〈人間〉を喪失し、この世の  
すべての権利を抛り捨て、まさに獣同然。

## 7

酔いどれの他人さまの心を喜ばせるため、私が  
自分の理性を すべて喪うというのか？  
神は私に その酒豪の酒量と頑健には及ばぬ体をお与えなされた。  
相手の酒豪が喜ぶほどに私が痛飲、この身が苦しまねばならぬのか？  
三杯目は止めたまえ。君がもし自制を失くせば、  
されば、君は意気地なし、酒こそが大胆。

## 8

伊達者相手に理屈を説いても無駄なら、その場を立つがよい。  
(難破のときには よろず各々のやり方で逃げ出すもの。)  
共倒れで君の身まで 墓穴に葬るなかれ。  
社交儀礼のために 獣になり下がるのはよせ。止したまえ、  
三杯目は止めるのだ、さもなくば この場やを去れ。  
酒こそは何にもまして、心に刻まれた神の聖像を穢すもの。

9

よしんば酒や浮気で罪を犯しても、それを自慢するのは止せ、  
 自分の恥を 自慢のたねとはするな。  
 人間の弱さは 謙虚でこそ赦される、  
 だが自慢する奴は 己れの高慢話で 赦しを閉め出してしまふ。  
 其奴は 真っ向から神に逆らい、哀れ  
 土くれの身で 無辺の大空に挑む者。

10

君の口を創られた主の聖名を みだりに口にするな。  
 それは一文の得にもならず、弁明の余地もない。  
 肉慾と酒は愉楽のため、食欲は利得のためだ、と弁明しよう。  
 だが、やたら神にかけて誓う奴は その開いた口から  
 いたずらに 己れの魂を吐き出すのだ、神を畏れもせずに。  
 もし私が快樂主義者であろうとも、誓言などは無しで済ませ得よう。

11

他人の冗談を語るときも、誓いは省くように、  
 真の知性なら そんなものは 必要の筈もない。  
 他人の話からは、楽しい笑いをついばみ、罪は捨てよ。  
 リングでも 清潔に食べたいひとは、皮をむく。  
 神の御名の威力を 遊び半分捨て去るではない、  
 それこそが、悲痛で意気消沈のとき 君の最善の依りどころだ。

12

軽微な罪ほど 最も手痛く罰せられる。  
 なぜなら それを避けることは 大層手軽なのだから。  
 なにせ私たちには それに気づき それを慎むだけの知恵はあるのだ。  
 君の魂にある宝の堆積を 崩してしまうな。  
 もし君が死にたいと思うなら、地獄の門は広いのだ、  
 慢心と爛れた罪が そこへの小径を大路に変えている。

13

嘘はつくな。君の心は神にたいして 真実であるように。  
 君の口は心に、行動は心と口の双方に、誠実であれ。  
 臆病者は嘘をつく、また鞭を恐れる者も。

たけり狂い揺れ動く魂は 嘘と泡とを飛ばすもの、  
おそれずに真実であれ。何ものも 嘘など無用。  
嘘をいとも欲がる過ちも、嘘をつけば、二つになる。

## 14

怠惰など吹きとばせ。だがそれは 着飾ったり  
恋愛ごっこやお世辞のやりとりなどで 果せるものではない。  
かようなことで日がな一日つぶすなら 天道様が君を叱咤しよう、  
陽光は ほんのしばしの借物ゆえに。

神は君の魂に 素晴らしい翼を賜われた。その羽根をベッドの中に  
押込んで 悪天候はすべて眠りあかそうなど、滅相もない。

## 15

君は役人？ ならば、厳格にやりたまえ。  
学問にうちこむのなら、鮮やかに写し取るのだ  
時が曖昧にしたものを。時の顎あごから 真実をば奪い還せ。  
兵士なら、世界中を 抜き身の刀を振りまわし 勲功を追い回せ。  
馬鹿は止せ。誰しもが、その気になれば、  
輝かしい 尊厳ある生をもち得るのだ。

## 16

あ、英国よ！ 罪に、なかでも怠惰に、まみれた英国よ。  
君の懶惰らんだの体液を吐き出し、胸を栄光でいっぱいにしろ。  
紳士階級ジェントリーはメーメーと鳴くばかり。まるで英国の羊毛ウールの服地が  
羊の臆病を 君たちのなかに注ぎ込んだかのようだ。  
皆がみな こうというわけではない。だが、  
殆どが草原くさつばらに駆け去り、牧草地にふみ迷う。

## 17

この損失は主に 我々の教育に起因する。  
ある者は農地は耕すも、己れの子息せがれは雑草で窒息するがまま。  
ある者は 山うずらには意を注ぐとも わが子の振舞いなど目にも留めぬ。  
ある者は 子息を海外へ送り出せば、能事終われり。  
教育の術わざをば研鑽し、それを あなたの一大計画とはなせ。  
子に宿る神の御像みすがたに心感ぜずとも、わが子に宿る己れの像には心動かせ。

18

子息に大資産は用意しても、覇気の心を植えつけぬ者がある。  
 ために資産も子息も 水泡に帰す。  
 さもなくとも、子息を柔弱に育てあげ、親の遺産のすべてを必要な者にしてしまう。  
 これでは、まさに貧困そのもの。

暮らしゆくのに 五千ポンドも要る者は  
 僅か五ポンドしか要らぬ者と、全く同じほどの素寒貧。

19

子息を裕かにする方法は、かれの心を安らぎで  
 満たすこと、かれの鞆を、財宝で満たすまゑに。  
 満足を知らぬ富は 山に登り、溝の中なら吹き過ぎる  
 烈風をも もろに肌身にうける。

だが、あなたの子息が 十ポンドを満足の尺度となし得れば、  
 あなたの追加分はこれすべて かれの財宝とも呼ばれよう。

20

君が何かを、己れの能力の範囲内のことを、意図したときは  
 必ずやそれを成し遂げたまゑ。たとえそれが些細なことでも。  
 恒久不変の決心こそは 砕けた骨をもくっつけ、我らを牢乎となす、  
 気紛れな快樂が 我らを虜にしようと差し招くときでも。

己れ自身の契約を破棄する者は 己れを喪い、自然が  
 助け船にと創ったものをも、難破の暗礁へと変えてしまう。

21

万事男らしくやりたまえ、こそこそやるな。  
 国王がいつも御覧になっていると想うのだ、  
 王の王たる神はそうなのだから。にやにや笑いの友情は まさに俗人の偽善。  
 人目のないところにそれを置け、すると、偽善の糸玉もほどけてボロを出す。

悪事をなすのを恐れる者は 仕事に打込む。  
 善をなすのを怕がる者は しかと仮面を被るべし。

22

口には用心。病はそこから侵入するから。  
 君には二つの防御策あり、たとえ胃袋が叫ぶとも。

テーブル  
食卓では肉を切り分けるか、それとも お話をしたまえ。空腹を恐れるな。  
肉を切り分ける者は二人にたいし、話をする者は皆に、親切。  
肉をみよ、それを泥と思え、それからちよっぴり口にせよ。  
そして同時に、唱えたまえ、私は土を土に帰すと。

## 23

飲酒で自らが病がちの最中なのに、〈君の生活は実に規律正しい〉など  
冷かす手合いは 疎<sup>うと</sup>みたまえ。人間以外に、そうしない何物がある？  
家屋は規<sup>ル</sup>矩<sup>ル</sup>にそって建築され、国家もまたおなじ。  
出来るものなら、信頼厚き太陽をその黄道から  
誘<sup>おび</sup>き出してみたまえ。大空を招き寄せてみるがよい。  
かくして、規律正しく生きる人は よき道連れをもつ。

## 24

己れ自身を見張らぬ者は自墮落だ、こうして  
次に大きく緊張が弛むときには、朽ち果てて無に帰してしまおう。  
人間は規律のかたまり、きっちり縛られた束なのだ。  
かれの特性のそれぞれが すべて規則に署名している。  
己れ自身を喪うな、君のむら<sup>ヒューマ</sup>りに勝手に勝手をゆるすな。  
神は君に きちんと施錠して体液をお与えになったのだ。

## 25

必ずや 時折は独りになるのを 慣<sup>なら</sup>いとしたまえ。  
君自身に向って挨拶するのだ、君の魂が何を着けているか見ることだ。  
君の胸の内を 思い切って覗いてみたまえ。それは君自身のもの。  
そしてそこに見出すものを あちこちとひっくり返してみよ。  
よき相棒を見つけなくては 心落ちつかぬ者は  
住家を解体して、己れの心を 戸外に追出してしまおう。

## 26

儉約は大切。だが、貪欲は慎みたまえ。それゆえに  
与えなさい、君の必要には君の敬意を、友には彼の当然受けるべきものを。  
守銭奴が立派な人物であつたためしはない。真に生きよ。  
生きて、お金は活用せよ。さもなくば真実ではないのだ、  
君が生きようになったということは。確かに、お金はただ  
活用されてこそ、蔑むべき石ではなくなる。

27

君の収入をけっして超えるな。若い頃なら年間の総収入を費すことも出来得よう。  
 だが、年老いて もしうまく射当てようと思うなら  
 弓は短く射よ、つねに自分の賭金を減らすべし、  
 働く日が、それと共に己れの余命も 縮まりゆくとき。  
 君の子供たち、縁者たち、友だちが君を訪うのだ、  
 死出の旅路が きれいに皆と訣れを告げる前には。

28

羽振りのよいときには、悪に絶えず不信の眼を。  
 利得が君の心にしのび寄り 他の万事にたいし 君の眼を  
 曇らすことのないように。富は 魔法使いの悪魔なのだ。  
 その悪魔に勝ったと思う時には、悪魔の方こそ勝っている。  
 金は 触るのは安全だろう。だが、  
 手にくっつけば、いやっというほど深手を負う。

29

首に巻きついた 石袋で溺れようとも、  
 金の袋で溺れようと、何の相異があろう。頭をあげて上をみよ。  
 きら星を金と考えるのだ。数える術はなくとも、  
 努力してかち得ることは可能な、理想 希望の星々を。  
 金亡者の老婆ほど 無駄はない。彼女は  
 一事により三つを失う。安息、評判、己れの魂。

30

けっして借金には走るな。君自身の力量を見定めよ。  
 年20ポンドで暮らせぬ者は 40ポンドでも無理。  
 そんな者は放蕩者だ、自分自身に  
 法外に金のかかる代物だ。  
 奇抜で凝った道楽者は 半ズボンをやたら幅広く注文し、  
 余りの高価に 自分ではなく 仕立屋を責め立てる。

31

空望みに精力を費すな。能もなく、宮仕えも出来ぬくせに、  
 粋な衣装を着飾って 出世を求めんとする手合いは



自分の誓言で 己れの法螺話を信じてくれと 頼むに等しい。

彼らは、帆は張っていても 空船だ。

このことを 老練の廷臣たちは知っている。それゆえ、

終日走り続けることが出来るよう、そんな堅実な出発をなしたまえ。

## 32

衣装は、安くとも ふさわしいこそが第一。

気品あるたしなみこそは、かって店頭に並んだこともない素敵なしるもの。

それゆえ、〈これは あのレースとよく合うだろう〉とは言わず、

こう言いたまえ—〈これは 私のセンスで 素晴らしく着こなせよう〉と。

好みのうるさい凝り性は 止むことを知らぬ求愛。

労多くして得るものなく、長々しくうち続く愚行。

## 33

儲けを狙ってゲームをするな。楽しみでやれ。

楽しんで負けることができる以上の大金を

賭ける手合いは 己れの心臓を賭ける奴、恐らくは妻のそれをも。さらには  
彼女が産んだ子供まで。また 召使や教会にもとばちりが。

その地方を巡察する紋章官のみが、やっとのこと

教会の窓硝子に かれの破産した名を見つけだす破目となる。

## 34

でも、法外な賭博ゲームが好きでたまらぬのなら、

このことを学びたまえ—先輩の博徒たちはこのために

ばか高い授業料を支払わされた—負？ 座を立て、

勝？ その状態で立ちたまえ。

負けこみながら 懸命に座り続ける手合いは 身の破滅。賭博は一般市民の

ダイナマイト、平時にあって 家財もろとも 住家をも吹き飛ばしてしまう。

## 35

対話では大胆さこそが 今や羽振りをきかす。

だが忘れるな、空威張りほど 愚かしいものはありえぬことを。

そこでまず、君の心を真に価値ある美質で満たすよう、励みたまえ。

それから、威風堂々の進軍だ。

真の価値を身につけよ。大胆さがそれを素晴らしく

飾り立て、真価をひときわ引き立てようほど。

36

誰に対しても優しくしたまえ。なに、君の気性は気難しい？  
 では、そんな人びとと付合いたまえ。その人びとで きみを合金とはなせ。  
 厳しい妻を、顔をしかめる召使を、手に入れよ。  
 よろめき歩む者は 凸凹道こそ よろめかぬ。  
 とりわけ 己れ自身を制馭したまえ。赴くところ  
 自らの激情を 従順な下僕に変えうる人は 人生の闘いの勝利者だ。

37

口論にはとびつくな。はっきりと ずばり  
 思い切っても言わぬ方が、意気地なし。  
 些細な悔りを受ける度毎、君の面子が つぶれるなどと憤慨するな。  
 大いなる行為によって示すのだ、君が小さなことも出来ることを。  
 でも、実際には行なうな そんな小さなことは。このことを 君の見識とはなせ。  
 こうして、きみの自制を 勇気にこそ変えたまえ。

38

もし君の評判が 些々たることがあるたびに 揺らぐようなら、  
 そんなものは、有毒な幻想が織りあげる 脆薄な蜘蛛の巣だ。  
 ところが、偉大な戦士の名声は、大震動にも  
 びくつかぬ 厚手の素材から出来ていた。  
 思慮分別が友を選び、丁寧な振舞が、他の人びとをうまく扱う。  
 俗輩は、体よく去なしても、英明な人びとの 君への評価に変わりなし。

39

みだりに笑うな。知恵ある人は笑うことも稀、  
 ウィットは無知の者にのみ 珍しいゆえに。  
 君自身のことはめったに笑うな。その冗談に  
 君のことが一枚噛んで、その洒落に妙なおちがついたりせぬよう。  
 悪癖を、きみの楽しみとはなすでない。  
 糞の山にたかる蠅は、それによって 色も変わるものゆえ。

40

畑から小石をとり除くよう、楽しい笑いから  
 冒瀆、卑わい、罵りのつまみ出せ。これらは、

粗野な才智には たんと付きものの滓なのだ。  
 澄んだ知性には 無用の長物。それでも、迫力は負けはせぬ。  
 物事は よろず 戯れを孕むもの。君がその気になれば、  
 ウィットに欠ける素気無いものなど、ひとつとして無し。

## 41

機智は、手に負えない武器<sup>しろもの</sup>だ。時には友を、  
 時にはその創り手を でたらめに撃つ。君はその扱いのコツを  
 心得ている？ 好きにまかせて、それを甘やかしたりは止め。  
 だが、もしそれを欲しくとも、高く買いすぎたりはするな。  
 己れの力をこえるウィットを 好んで発する幾多の者は  
 しばしの間は 皆の可愛い道化<sup>フェール</sup>とならねばならぬ。

## 42

重厚にして思慮ある勇氣は 素晴らしい特性、  
 それは先駆<sup>さきがけ</sup>をつとめ、諸都市を征圧する。  
 ふざけ笑いをする者は、乳搾り女も同然だ。疫病や、  
 狼煙火<sup>のろし</sup>で おびえきって 自分の小歌<sup>おほこ</sup>までも忘れてしまう。  
 すると、彼が物笑いの種、ために彼の上機嫌はストップ、  
 かくて重厚な人物が その者の冗談をことごとく打ち破る。

## 43

偉い方々には、敬意をこめて敢然と 接したまえ。  
 さような配慮は その人びとが当然に享けるべきもの、でも  
 君のものを何ひとつ奪いはいはしない。他人様に仕える際には、  
 その方への心遣い<sup>づか</sup>か冷淡か、それに応じて、君の運も開けたり 潰れたり。  
 罪ある者には 糧<sup>ついで</sup>をめぐむな。追従<sup>ついで</sup>は 君を  
 のろわれた悪魔の片割れにしてしまうから。

## 44

高貴を妬むな。妬めば、そのぶん自分自身を  
 卑しくし その距りを 抜げるのみだ。  
 己れ自身の苦悩の種とは なるでない。他人様を傷つけず  
 自分を一層立派になすような、そんな妬みは 良き拍車。  
 君の激情の怨恨を正すのだ。さすれば、  
 激情は 幸せの光明へと君を導き進む。

45

卑賤の出が高位に昇進したとて、その人ゆえに、  
 その地位を 尊ぶ気持ちの薄れることのないように。  
 主の聖櫃こそ 君が崇めるもの、  
 それを背負う 牛にはあらず。

私がかまわぬ、たとえ玉座を飾る布が  
 豪華なアラス織りでなく、粗末なタペストリーであろうとも。

46

友を 君の胸の中に安置したまえ。心に常時 友の眼を着けるがよい、  
 友が 君の心の中にあるものを見られるように。  
 もし故あって 必要あらば、君は友のため犠牲となる。  
 君の血の滴りは 友の恐れをすべて救うに違いない。

だが今や、友愛は失せた。友情の道も消え果てた。たとえ昔、  
 グビデはヨナタン、キリストはヨハネを得たとしても。

47

保証人とはなるでない、もし父親の身であれば。  
 友愛は君と友の 個人同志の借り。子供たちの権利まで 私は  
 友に譲渡出来ぬ、友も 奪うべきではない。  
 むしろ 友と私の双方が死ぬべきだ、子供らの生を阻むくらいなら。

父親たるもの、まず第一に自然の目的と契りを結び、  
 自然の保証人というわけだ、友の保証人であるより先に。

48

独身なら、君の資産と土地とを 悉く  
 友のために捧げるもよい。だが、それ以上は駄目。  
 一人の人間として 自分のひと財産を与えたまえ。  
 友のため己れを奴隷の身に落とすほどでも 二人分も稼ぐ義務はない。

神は私を一人の人間として創られた。愛も 私をそれ以上には出来ぬ。  
 もしそれ以上を求めれば、試練がせまり、わが身の非力を幾多痛感。

49

対話において、相手を喜ばせようと望むなら、  
 丁寧な、役立つ、真新しい、またはウィットあふれる、話に限る。

有益は 努力に、ウィットは 当意即妙に、由来する。  
 丁重は宮廷で、ニュースは市街<sup>まち</sup>で、生まれ育つ。  
 これらをしこたま蓄え、それから、相手に  
 まさにぴったりの カードを扱<sup>つか</sup>びだすのだ。

## 50

相手は誰でも、手際よく 相手の最も精通している話題に誘い込め。  
 そうすれば、相手にも自分にも、喜びを与えることになるのだから。  
 (だが、無知な驕慢者は 己れの手の内をあかすより、むしろ  
 自分の好機をすってしまふ。) 相手の持ち札から、  
 更に何を質問すべきか、こっそりと盗みとれ。  
 うまく疑問を呈すれば、相手は君に釘づけ、そして君の持ち札は安泰だ。

## 51

君が射撃の名手なら、自分のしゃべれることを 総ていっぺんに  
 話してしまうな。節約が肝心。他の人々にも  
 しゃべる機会を与えることだ。自分の知恵<sup>ウィット</sup>と他人のそれを、  
 先廻りして惜しげもなく、一度に全部並べ立てるな、  
 まるで遺言書でも作るように。礼儀をわきまえた客は、御馳走をみな  
 ひとりで食べてはしまわない。同じく、話は 独り占めしないもの。

## 52

議論の際は穏やかに。痛烈に論じ立てれば、へまも  
 重大過失、真実も 無礼に変わってしまう。  
 どうして私が、他人の間違いに 彼の病気や  
 貧窮に対する以上に 興奮せねばならぬのか？  
 相手を愛しておれば 然<sup>しか</sup>も有りなん。だが、怒りは  
 愛ではなく、分別でもない。よって、穏やかに進むべし。

## 53

沈着は大きな強みだ。相手を焦<sup>こ</sup>らす者は彼の熱気で  
 自分を温めることも、相手の支離滅裂に注目し、  
 彼の苛立ちを楽しむことも出来る。  
 老練の剣士が、相手が興奮のあまり疲れ果てるのを待つが如くに。  
 真実は、沸きたつ雲の中には住まぬ。そこにかかる虹は  
 しばしば天球層を目指すも、決して それにはとどかぬ。

54

相手の言葉に注目せよ。多くの人はいぬぼれ強く、  
 そのためよく、己れ自身の考えに応えるゆえに。  
 総てを把握し、それから等しく慎重に、  
 葉を量るよう、相手の論理の 細部の各々を比較考量すべし。  
 もし友に真実あれば、真実と友の双方に歩調を合わせよ。  
 友の勝利を共に味わい、そして 真実を認めたまえ。

55

君の生きる<sup>ところ</sup>場所で 有益な人物となれ。人々が  
 君のうれしい存在を常に必要とし、かつ望むように。  
 親切、才能、高位こそは、このことを成就するための方途。  
 人びとの欲求と望みとを探り出し、その場で  
 叶えてさしあげよ。なべて世の喜びは  
 親切の大きな喜びに比ぶれば、劣るのだ。

56

君の行動は低く、志しは高く、定めたまえ。  
 さすれば、謙虚にして、高邁になれるはずだ。  
 心挫けるな。高空を目ざす人は、  
 樹木を狙う者より 遙か高みを射るのだ。  
 謙虚と<sup>ない</sup>緇ひ交ぜられた ほんの僅かの誇りは、  
 熱病をも 無気力をも とともに癒してくれる。

57

君の精神を、常にある事に傾注せよ。それが  
 何処で、何時、如何にして 成就できるか、絶えず想を練りつつ。  
 怠惰のあるところ蛆虫が湧く。着実な旅人は  
 時折は足を休めるとも、絶えず前へ歩み続ける。  
 生氣潑刺の精神だけが、生きているのだ。  
 他の者たちについては、こう記せ、くしかじかの者、ここに眠る」と。

58

それが愛であれ また 名誉であれ、どんな些少な損失も  
 甘くみるな。すべてに 注意せよ。

到る所で 太陽のよう 輝きたまえ。

君の信望の量<sup>かさ</sup>が 膨らむのか、はた 目減りするの<sup>かさ</sup>か、確かめるのだ。

〈俺はどうしても構わぬ〉などとぬかす輩を、敗北者も同然だと思ふ。

そんな手合を教え訓すのは、骨折り損のくたびれもうけだ。

## 59

何人<sup>なんびと</sup>の愛も蔑むではない、よしんば身分卑しき者の愛であれ。

愛こそは、偉大な王への贈物。

誰を問わず、なおのこと、

君の敵とは なすなかれ。

大砲に劣らず、小さな投石器にも、破壊力はある。

腕利きの職人は、偶然<sup>たまたま</sup>手にするどんなけちな道具とて、拒みはしない。

## 60

他の人びとの知恵とはみな、つまりはこうなのだ

与えられるものは 総て受け容れるべし。富であれ、

愛であれ、言葉であれ。有難迷惑は

何ひとつとしてない。よく消化すれば、みな健康に役立つ。

こうしてそれから、フェアな行為の及ぶ限り、

負債はすべて返済したまえ。負債ほど明白なものも無いゆえに。

## 61

自分の長所はすべて維持せよ。また 他人の美点は

みな採り入れよ、だが、悪弊は退けたまえ。

あの積極性は受け入れよ、だが、虚栄心はだめだ。

すべてを真似る者は、己れの個性を無くしてしまう。

そのときどきの気紛れで 他の人びとに追従すれば、

いずれ、君の健全な精神も すっかり失せてしまおう。

## 62

君の身の物にあっては 清潔をこそ 大切に。

皆の人が喜んで、君のもとへ 花のように 近寄るように。

だらしな奴は 自分の汚臭を早ばやと溜こんで、

己れの死際を 先どりする。

君の心の芳香をして その作用<sup>はたらき</sup>を、身体

衣装 住居のうゑに 広げるがよい。

63

施しをする際は、君の資力と相手の真価とに留意せよ。  
 天の国は 実に素晴らしいお買い得と考えたまえ。  
 だがそれは、たった一枚の硬貨をたださし出すだけでは 購えぬ。  
 人を生かすためには、神と手を結ぶべし。  
 すべての人に 価値あるものを恵みなさい。善良で貧しい人には、  
 君がその人に成りかわり、彼の最初の境遇に 己れ自身を置くほどまでに。

64

人間は 神の似像にすがた。おまけに、貧しき人はキリストに瓜二つ。  
 両方の似像を 大切にせよ。神はそんな人の為を思って裁定なされ、  
 恩寵は彼のものと思し召す。〈神にかほどにも捧げたり〉  
 と認めたまえ。さすれば 君の願いは聞き容れられよう。  
 君の施しを まず先に行え。こうして、天国の門を己れのために  
 開いておくのだ。さもなくば、君も施しも ともに遅れをとろう。

65

神のみもとに還したまえ、十分の一税と時間とを、これは当然神に支払われるべきもの。  
 くすね取った十分の一税は 財産全体を腐食する。  
 日曜日の安息は守るのだ。教会の鐘が鳴る時には、こう思いたまえ、  
 あれは天使の音楽。それゆえ、遅れてはならぬ。  
 神がいまこそ、御恵みを配り賜う。もしも国王がそうなさるのなら、何人か  
 急がぬ者があろう、いや、金を払わぬ者がいるであろうか、その光景を見んものと。

66

日曜日には二度、神の当然受くべきものを想い起こすべし。  
 なぜなら一週ずっと 神は君に 糧を度々お恵みになられたのだから。  
 君の馳走は一段と立派なものにされている、それを逃すではない。  
 それは更に美味しく、恐らくは君を救うことも出来るであろうゆえ。  
 大いなる御心に背くではない。おい、つむじを曲げるな。  
 このとき以外は、君が望むときに 断食を。断食は君の得、損にはあらず。

67

内輪の祈りも立派なもくろみ。だが、  
 会衆の祈りは より多くの約束 より大きな愛を はらむ。



その愛は 参列者の心にとっての 強き引力、目にとっては 励ましの微しだ。  
我らは各々 ただ心の冷えた嘆願者。そこで、最も温かい所へ赴こう。

六、七人連れの祈りを離れ、最大多数の会衆と 共に祈れ。  
最多の人々が祈るところに 天国は在るがゆえ。

## 68

教会にいったん足を踏み入れたら、帽子は脱ぎたまえ。  
神はそこでは君より偉大なのだ。君はただ神に許されて  
教会内に在るにすぎぬ。そこで、心せよ、  
自らを すべからく尊崇と畏敬の念そのものとはなせ。  
跪<sup>ひざまず</sup>いても 絹靴下は駄目にはならぬ。へたな威儀など  
うち棄てよ。教会の門の内では 万人は平等なのだ。

## 69

説教には出かけるべし。だが、祈りにこそ 一等足繁く。  
祈りこそは 説教の究極目標。早く、衣装を着けよ。  
片方の飾りピンがないとて、うちに留まったりはするな。  
なんと君は、ピン一本のため、全世界の幾倍にも値する喜びを 逸してしまうのか。  
こうして地獄が 君のうける御恵みをからかいのめし、  
とことん君を蔑<sup>さげ</sup>すみ笑う。衣装はしっかりと着けていようと、君の魂はゆらゆらだ。

## 70

礼拝中は 両眼は閉じるべし。そして、その眼を  
心へと向けたまえ。そこに罪を見つけ出し、眼のゆえにこそ生じた  
汚れを、君の眼が泣き祓<sup>はら</sup>うことが叶うように。  
二つの扉を締めきれば、すべては耳から 心に入る。  
礼拝の最中に 他の参列者の均整美に見惚<sup>と</sup>れる奴は  
その美をすべて 己れの醜さに変えてしまう。

## 71

むなしい、忙<sup>むわ</sup>しない想念を 心にゆるすな。  
君の仕事 計画 楽しみごとを、そこに持ち込むではない。  
キリストは御自身の礼拝堂を潔め給うた。君も、己れの心をそうするべし。  
世の雑念はことごとく、まさに君をたぶらかさんと 寄り集う泥棒共だ。  
君の心の動きには、くれぐれも気をつけたまえ。  
教会はわれらにとって、天国とも はた 地獄ともなるものゆえに。

72

説教師を審くなかれ。なぜなら師こそ、君を裁く方だから。

君が師を嫌いでは、その人は理解できぬ。

神は説教を、愚かなものと称され給うた。土の器からも

宝を拾いあげてを 厭うなかれ。

最低の説教師でも何か良いことを語るもの。よしんば総てが

意味を欠くとも、神こそがその聖句を選ばれ、忍耐を説かれ給うのだ。

73

忍耐と 説教の結びの祝福とを 受けとる者は

骨折り損とはならぬ。教会に参列したため、

飲み仲間と一緒にあれば 落ち込んだかもしれぬ溝に、

落ちずに済む者は、得をしたのだ。

神の住居を愛で、地上で多くの聖徒と合体するのを

好むひとは、いつの日にか 聖徒と共に光り輝く。

74

説教師の言廻しや表情を 冷やかすではない。

君の罪が説教を、不首尾に終わらせることなどなかったと、どうして判る？

それなら、君の責任と彼のそれとを 告白したまえ。

師がどうであろうとも、神こそが彼を遣わされたのだ。おお、その言は 待った。

彼の主ゆえに 彼を愛したまえ。師の地位は、

よし欠陥あるとも、彼を悪しき医師とはなさぬ。

75

地獄で これほどの耐え難い痛恨をこうむる者もあるまい、

神の救いの方途を 嘲笑う者ほどに。

オイルや芳香油パルサユで死ぬ者を、どんな軟膏が救うことが出来得よう？

彼らは貪るように 神の呪いを飲み尽くす。

ユダヤ人は 雷鳴の戒律を拒んだ。そして我らは 純朴な説教の

愚しさを拒む。神が我らを 囲み給うとも、誰か聖くあり得ようや？

76

夜には 昼間行ったことを締め括りたまえ。朝には なさねばならぬことを。

君の魂に 衣装を着けたり 脱がせたり、

魂の盛衰に留意せよ。もし 君の時計と共に  
魂もまた弛<sup>たる</sup>みこめば、そのときは双方のネジをぐっと巻くのだ。  
我らは まず間違いなく、審きを受ける身、  
そこで、収支の帳尻を合わせておけ。

## 77

要するに、雄々しく振舞いたまえ、男らしく行動したまえ。  
快樂は、近づくのでなく 去りゆくのを 眺むべし。  
どんな瑣末な美德でも 先に延ばすな。悲痛にかまけて  
時を費やし、束の間の人生を 間のびさせるな。  
悪をなせば、喜びは消え、苦悩が残る。  
善をなせば、苦悩は消え、喜びぞ残る。

教会入口の楯<sup>まぐさ</sup> (Superliminare)

以上の教訓により、清めの水を心に撒かれ  
本堂内での振舞い方を教わった、そなたよ  
近くよりて 味わいたまえ、  
教会のさし出す 神秘の馳走を。

去れ、瀆<sup>とく</sup>神の徒は。ここには 無用。  
ただ、聖く 純な 澄んだ心のもものみが  
あるいは、そうあらんと念じ喘ぐもののみが  
危険覚悟で、さらに先へと進むべし。

## 後 記

1633年2月、四十才の誕生日を目前にした、死の三週間ほど前のこと、いまやベマトンの教区牧師であったG.ハーバートは、ひとつの詩稿を親友N.フェラー (Nicholas Ferrar) へ人づてに託した。そしてこの友の奔走により、この草稿は無事にその年の内には上梓の運びとなり、その後三年間で4版を重ねる程の大反響を得た。この詩集こそが『聖堂』(The Temple) と称されるもので、ハーバートの唯一の英詩集でもある。

『聖堂』は構成上、三部より成り、第一部は序曲とも目される導入部の〈教会の袖廊<sup>ポーチ</sup>(The Church-Porch)〉、第二部はこの詩集の本体部を成す約160の詩篇よりなる〈教会(The Church)〉、結びの第三部は279行にわたる〈戦う教会(The Church Militant)〉である。

ここに訳出を試みた〈教会の袖廊<sup>ポーチ</sup>〉は6行連の462行よりなり、〈教会〉本堂に入るため、人びとが潔めの聖水を頭上に撒かれ、心身を祓い清めてもらう行為を象徴的に表現していることは、この副題が〈清めの柄杓<sup>ひしゃく</sup>〉であることから明らかであろう。

第二部の〈教会〉が天上の言葉で神の愛を主にむかって歌いあげたものであるとすれば、第一

部の導入部は、地上の言葉で、時の世の青年達、特に貴族、ジェントリー階級の子弟達にたいして、人のなすべき行為、行動の指針、規律等について諄々と教え諭したものである。そのため当然のことながら、旧約聖書の箴言を髣髴させるような、極めて教訓的で説教調の警句を基調音とする特異な詩であることは否定できない。またスタイルも、鋭く短く、時には格言風に余りにも削りそがれているため、謎めいて深遠で、詩人の本音が聴きとりにくいことも度々である。このようなときは、Hutchinson の注釈 (1941年) に劣らず、E.C.Lowe (1867年)、A.B.Grosart (1874年)、それに G.H.Palmer (1915年) などのそれは大きな助け船となってくれた。

このような作品を全く注(釈)ぬきで訳出を敢行したのは、一つには紙幅のきびしい制約と、更には、注(釈)をいちいち付ければ際限がなく、読者の煩しさもどれ程かと慮り、〈教会〉の翻訳 (1985) のときとは趣向を変えた次第である。

訳者に目下入手出来る限りの資料や注には当り、幾度が読みかえすうちに、おぼろげながら、濃霧の中から詩人の意図した真意らしきものがほの見えて来た時には、知的興奮以上のものを感じたりもした。こうして、注が全然なくとも、読者がさほど無理なく、一読してほぼ理解できるような訳詩をと念じた積りではあるが、そのため、原詩の警句的な簡勁さが犠牲にされることもある程度は避けがたかった。全77連の各々が ababcc と押韻しているが、特に結びの対句の カプレット もつ格言的滋味と有情をびったりの日本語に置き換えることは訳者には至難を極めた。

なお底本としては、F.E.Hutchinson 編の *The Works of George Herbert* (1941, Oxford) に拠るが、その他、A.B.Grosart 編 (1874, Reprinted 1982)、J.H.Summers 編 (1967, Signet)、C.A.Patrides 編 (1974, Everyman)、L.C.Martz 編 (1986, Oxford.U.P.) 等も併せて参照した。